

ほりいちいせき しゅつどいぶつ 堀Ⅰ遺跡とその出土遺物

市指定史跡

婦中町堀字立寺町

317

この遺跡の墓にめぐらせた石の配置(右写真、配石墓)からは、鎌倉時代から室町時代に造られた墓地の景観がうかがえます。中世の墓の多くは、石を配置しない土壇墓であるのに対し、この堀Ⅰ遺跡の墓地は石で四角く区画されていました。このことから墓に埋葬された人々は、有力者層であったと考えられます。

配石墓の北側には、塚状の遺構があり、塚の内部には多数の蔵骨器が密集して埋葬されていました。蔵骨器には、13世紀から14世紀の壺(珠洲焼や八尾焼、瀬戸焼、越前焼)やそれにかぶせる蓋(珠洲焼や八尾焼の鉢)などが見つかった他、灯明皿や杯に使った中世土師器も出土しました。また塚の上には、五輪塔などの石造物もありました。



出土した蔵骨器



発掘された配石墓

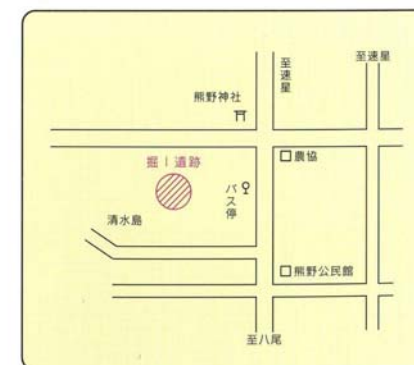


塚状遺構を十字に掘って調査



五輪塔

堀Ⅰ遺跡の北西方には、熊野神社周辺に密集して形成される中名Ⅰ遺跡などの遺跡群、南東方には清水島Ⅱ遺跡があり、古代から中世にかけてこの一帯は栄えていたと考えられています。



堀 下車(地鉄バス) 徒歩10分